

先人

福山ゆかりの先人

「福山」というまちが誕生して400年を機に、福山市の出身またはゆかりの深い人物の功績を称え、郷土への誇りと愛着を育み、次代に継承していくため、2022年（令和4年）8月10日に「福山ゆかりの先人」が選定されました。

1	長谷川新右衛門	はせがわ しんえもん	2
2	水野 勝成	みずの かつなり	
3	野々口 立圃	ののぐち りゅうほ	3
4	本庄 重政	ほんじょう しげまさ	
5	宮原 直仰	みやはら なおゆき	4
6	菅茶山	かんちゃざん	
7	河相 周兵衛	かわい しゅうべえ	5
8	葛原 勾当	くずはら こうとう	
9	阿部 正弘	あべ まさひろ	6
10	富田 久三郎	とみた きゅうざぶろう	7
11	窪田 次郎	くぼた じろう	
12	丸山 茂助	まるやま もすけ	8
13	清水 郁太郎	しみず いくたろう	
14	森下 博	もりした ひろし	9
15	武田 五一	たけだ ごいち	
16	山本 瀧之助	やまもと たきのすけ	
17	吉田 龍蔵	よしだ りょうぞう	10
18	磯 永吉	いそ えいきち	11
19	藤井 厚二	ふじい こうじ	
20	宮城 道雄	みやぎ みちお	
21	藤井 崇治	ふじい そうじ	12
22	小山 祐士	こやま ゆうし	
23	天野 辰雄	あまの たつお	
24	塩出 英雄	しおで ひでお	13
25	本田 實	ほんだ みのる	
26	木下 夕爾	きのした ゆうじ	
27	小林 政夫	こばやし まさお	14
28	大島 久見	おおしま ひさみ	
29	榮久庵 憲司	えくあん けんじ	

「福山ゆかりの先人」は29人いるよ。どんなことをした人なのかな。



ばらのまち福山
イメージキャラクター
「ローラ」

1 長谷川新右衛門 (1531年～1612年)

沼隈は、古くから畳表^{たたみおもて}を織ることが盛んな土地でした。畳表の原料のい草を織るのは、大変な苦勞でした。

約400年前、沼隈郡山南村^{さんなむら}（現在の福山市沼隈町山南）でくらしていた長谷川新右衛門は、短い草を捨て、長い草だけで、苦勞して畳表を織っている農家の人々をみて、「短い草だけでも織ることはできないか。」と研究を重ねました。そして、ついに畳表の中央で短い草をつなぐ「中つぎ表」を発明しました。

これにより、畳表の生産量は大きく増加しました。この畳表は、「備後表」として、備後の特産物となっていました。



〔長谷川新右衛門の墓〕

2 水野勝成 (1564年～1651年)

私たちの町の基礎^{きそ}は、約400年前に、水野勝成によって築かれました。

水野勝成は1564年（永禄7年）三河国^{みかわのくに}（今の愛知県）に生まれました。江戸幕府を築いた徳川家康とは、いとこの関係です。勝成が21歳^{さい}のとき、父親から親子の縁^{えん}を切られ放浪^{ほうろう}の旅に出ます。その放浪中に、この備後の地にも来たことがありました。その後、家康のはからいで父親と仲直りし、刈屋^{かりや}（今の愛知県）城主になり、1619年（元和5年）^{げん な}には、備後十萬石^{じゅうまんごく}の領主となりました。

当時、備後地方の中心城であった神辺城（現在の神辺町川北・川南）に代えて、現在の福山城がある常興寺山^{じょうこうじ}に新たな城を築きました。これは海にも近く、陸路にも近い所だったからです。その城を中心につくられた町が今の福山です。



〔水野勝成像（福山城跡）〕

勝成は、福山藩主^{はんしゅ}になってから福山の町の開発や発展に努めました。福山の町は海に近いので、井戸を掘っても塩水が出てきます。そこで、芦田川の水を町にひく上水道の工事を行い水が飲めるようにしました。

また、自ら開墾^{かいこん}した土地^{あた}を無料で与えることで農民や商人などを集めて産業の発展につなげました。特に、い草や木綿の生産を進めます。い草から作られる畳は「備後表」と呼ばれ、全国で最高級品として知られました。木綿の生産はのちの「備後絣^{びんごがすり}」につながりま

した。

芦田川は大雨が降ると氾濫^{はんらん}していたので、川に堤防^{ていぼう}をつくるなどの治水工事を行ったり、新田を増やすために春日大池，服部大池，瀬戸大池の開発を行ったりしました。その他，小さな用水池や水路もつくり，福山の人たちが豊かにくらすようにしていきました。

1651年（慶安^{けいあん}4年），福山城内において88歳で亡くなりました。賢忠寺^{けんちゅうじ}にお墓がつくられています。



〔水野勝成の墓（賢忠寺）〕

3 野々口立圃^{ののぐちりゅうほ}（1595年～1669年）

野々口立圃^{ののぐちりゅうほ}は，1595年（文禄^{ぶんろく}4年），現在の京都府に生まれた俳人^{はいじん}（俳句を作る人）です。1651年（慶安^{けいあん}4年）に福山に来て，福山藩2代藩主の水野勝俊^{みずのかつとし}に仕えました。草戸明王院^{くさどみょうおういん}について書いた『草戸記^{くさどき}』や大名が江戸の将軍に会いに行く参府^{さんぷ}の際の道中の体験などを書いた紀行文^{きこうぶん}，祈願^{きがん}のために作品を寺社へ奉納する奉納俳諧^{ほうのうはいかい}など多くの作品を残しました。

1662年（寛文^{かんぶん}2年）まで福山で過ごし，文学の普及に大きな功績を残しました。

4 本庄重政^{ほんじょうしげまさ}（1606年～1676年）

本庄重政^{ほんじょうしげまさ}は，尾張^{おわり}の国（現在の愛知県）に生まれました。青年^{こころ}の頃は地方を旅してまわり，赤穂藩^{あこう}（現在の兵庫県）で塩作りを学びました。

福山藩に移り，松永の遠浅の海に塩田をつくることを藩に申し出て認められ，8年間かけて干拓地^{かんたくち}を完成させました。

松永の塩作りはその後，約300年続き，“塩の町松永”の発展を支えました。

松永の父とも呼ばれており，松永駅前には，銅像が建てられています。



〔本庄重政銅像〕

5 宮原直愷（1702年～1776年）

宮原直愷^{みやはらなおゆき}は現在の栃木県に生まれました。医学や測量の技術を身につけ、福山藩のお金を扱う勘定方^{かんじょうがた}として仕えました。江戸時代中期には、福山藩領の各地域に関する歴史について調査・研究し、郷土史^{きょうどし}の「備陽六郡志^{びようろくぐんし}」を作成しました。これは福山の歴史を知るうえで重要な資料となっており、福山市の重要文化財に指定されています。

6 菅茶山（1748年～1827年）

菅茶山は今の福山市神辺町に生まれ、19歳の時、京都に出て医学や儒教^{じゅきょう}（中国の学問）の考えを元にした朱子学^{しゅしがく}を学びました。

1781年（天明元年）故郷に戻り、学問を志す人々のために教育の場として「黄葉夕陽村舎^{こうようせきやうそんしゃ}」という塾^{じゅく}をつくりました。それが1796年（寛政8年）に郷校「神辺学問所^{かんせい}」（通称「廉塾^{れん}」）になりました。



〔菅茶山像〕



〔廉塾講堂〕



〔廉塾講堂の竹縁・方円の手水鉢〕



手水鉢^{ちょうずばち}の○と□の形には、「水は入れ物によってどんな形にもかわる。人も教育によって、良くも悪くもなる。」という意味が込められているそうだよ。

菅茶山は漢詩（漢字だけでつくられた詩）をつくることに優れていました。

茶山^{しょうがい}が生涯につくった漢詩は2400首余りにおよび、1812年（文化9年）に出された詩集「黄葉夕陽村舎詩」（全13巻）に収められ、当時のベストセラーになりました。

ふるさと豆知識

茶山ポエム

茶山が詠んだ元々の漢詩の意味を大切にしつつ、茶山がながめた景色を思い浮かべられるような現代詩に書きかえて親んでいるもの。

「画山水」
 溪村三五戸
 一向絶風塵
 自種梅花後
 春來引外人
 (よみかた)
 けいそん
 さんごこ
 いっこう
 ふうじんをたつ
 ばいかを
 うえしのちより
 しゅんらい
 がいじんをひく

(意味)

谷間の三～五戸の寒村、全く世外の仙境だ。それが梅花を植えてからこのかた、春になれば方々から花見客を呼ぶ。



「梅」
 山の谷間の奥深く
 小さい村があつたんだ
 家は四、五軒 さみしいな
 だれも来ないよ さみしいな
 ところが村人 梅の木植えた
 それから後の 谷間の春は
 花見の人で 大にぎわい

〔茶山ポエム〕

7 河相周兵衛 (1764年～1833年)

河相周兵衛は、深安郡千田村(現在の福山市千田町)に生まれました。村の役人である庄屋を務め、福山藩領内の有力な農民や商人と協力し、食糧不足で飢饉になったときに貧しい人を救済するため「福府義倉」という組織の創設に尽力しました。

また、河相周兵衛は図書の購入や医師の育成、中国の学問である儒学の振興にも努めました。



〔河相周兵衛〕

8 葛原勾当 (1812年～1882年)

安那郡八尋村(現在の福山市神辺町八尋)出身の葛原勾当は、江戸時代の終わり頃の文化人で、盲目の琴の名手です。勾当は、自ら考えた木活字による印刷用具(県の重要文化財)を使って、46年間日記を書き続けました。



〔葛原勾当〕

9 阿部正弘 (1819年~1857年)

日本が大混乱の時に、将来のことを考えて大きな決断をした人物が阿部正弘です。

阿部正弘は1819年(文政2年)に江戸で生まれました。1836年(天保7年)に第13代福山藩主になり、翌年、それまでくらしていた江戸から福山にお国入りしました。正弘が子どもの頃からとても優秀であったことを、第12代将軍であった徳川家慶は評価していました。そうしたこともあって、25歳という若さで老中に就きました。

阿部正弘は、12年間江戸幕府の老中首座(現在の内閣総理大臣)という役職を務めました。正弘が老中になった頃、日本は鎖国を行い、オランダ・中国・朝鮮といった限られた国としか交易をしていませんでした。しかし、アメリカやイギリス、ロシアなどの多くの外国船が日本にやって来て、交易することを求めてきました。阿部正弘は、政治のリーダーとして、次々とやってくる外国からの交易を求める声に対応するために日本国中をまとめようとししました。そのため、これまで老中の考えを中心に進めていた政治を、様々な役職の人たちから意見を集めながら重要な問題を考えるようにしました。

特に、1853年(嘉永6年)アメリカのペリー来航時には、全国の藩主に意見を求めました。正弘は、様々な意見を参考にしながら、日米和親条約を結ぶことを決断したのです。

また、日本が混乱した中で、日本をほかの外国と同じくらいの力を持った国にするため、有能な人を育てていく必要性を感じ、1855年(安政2年)、福山藩の藩校「弘道館」を「誠之館」と改め、身分に関係なく弓、槍、剣術などの武芸や国学、洋学、医学などの文芸を学ばせました。このように、正弘は江戸幕府で長い間続いた鎖国体制を終わらせ、開国を決断するとともに、日本の将来のことを考えて、政治の仕組みを変えたり、次の時代を担う人を育てたりして、現在の国際社会のもとを築きました。



〔阿部正弘肖像画〕

阿部正弘は、勝海舟を登用し、開国後、海軍伝習所をつくって、国防に力を入れたんだよ。

坂本龍馬もそこで学んでいたよ。



ふるさと豆知識

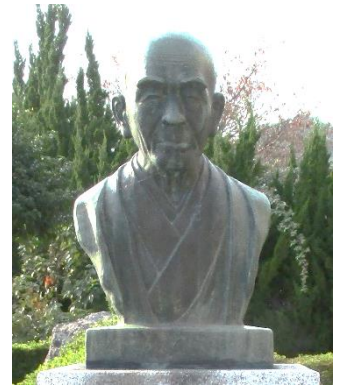
阿部正弘が福山藩の重役たちに言った言葉

このたびの浦賀にペリーが来航したことは、各々みんなが知るころである。時が移り、国家が盛衰するのは古来まぬがれないところであるが、今のまま放っておくわけにはいかない。今日の国力衰退を思うと身につまされる思いがする。

外国の圧力に屈しないためにも幕政改革を進めなければならない。まず、わが藩から文武を引き立てて、みんなの士気を高めるためにも教育制度改革を行う。

10 富田久三郎（1828年～1911年）

富田久三郎は、芦田郡下有地村（現在の福山市芦田町）生まれ、日本三大^{かすり}絣の一つである「備後^{びんご}絣」の織り方を生み出しました。絣とは、模様がかすれて見えることが特徴の織物のことです。また、18歳の時、絹の織り方を木綿織物に応用し、井桁^{いげ}絣を誕生させました。さらに同業者の組合をつくるなど指導的な役割を果たしました。これらの功績は現在のデニム生産量日本一につながっています。



〔富田久三郎〕

11 窪田次郎（1835年～1902年）

わたしたちは現在、学校で誰もが平等に教育を受けることができます。それは、1872年（明治5年）に明治政府によって「学制」が出されたからです。この学制に大きな影^{えい}響を与えた人が福山出身の窪田次郎です。

次郎は1835年（天保6年）に安那郡粟根村（現在の福山市加茂町）の医者^{いしや}の家に生まれ、自分も医者になるために大阪に出て多くの先生に学びました。1861年（文久元年）に粟根村^{もど}に戻り、翌年から父に代わって村の人たちの医療活動を始めました。

次郎は1871年（明治4年）に、生まれた家や身分に関係なく誰もが教育を受けることのできる啓蒙所を設置しま



〔窪田次郎〕

した。この啓蒙所が後の小学校へつながっていきます。また、バセドー氏病の発見や日本住血吸虫やコレラの研究に努めたりするなど医療、衛生、政治などいろいろな分野で活躍しました。

次郎は、人間が人間らしく生きるためには「衛生」「資産」「品行」が大切であるという考え方を持っていました。「衛生」とは、「生」を「衛」^{まも}る、つまり、人間が天から与えられた生命を生きて全^{まっ}うすることです。この「衛生」を全うするために「資産」、つまりお金が必要であり、「資産」を維持^{いじ}するためには「品行」、つまり正しい行いが必要です。これらは、一人一人の個人の問題ではなく、国や社会全体の問題であると考えていました。そこで、「資産」を維持^{いじ}するためには政治経済が重要であること、「品行」を正すためには教育が重要であると考え、次郎は医療活動のほかにも様々なことに取り組むようになりました。

1つ目は1871年（明治4年）粟根村で「民会^{みんかい}」という、日本で初めての選挙による村議会を開きました。こうした動きは、やがて自由民権運動として国会開設の要求につな

っていきます。

2つ目は1872年(明治5年)岡山県の笠岡^{かさおか}を中心に「細謹社^{さいきんしゃ}」という本屋を開きました。都会と比べると地方にくらす人たちは新しい本をなかなか手に入れることができません。誰でも本を読めるように、本屋を開きました。

3つ目は1873年(明治6年)栗根村^{はくぶんかい}で「博聞会^{だんわ}」という談話会を開き、村の人が集まって意見や知識^{ちうかん}の交換をできる場を作りました。

そのほかには、啓蒙所の設置や医者^{いしや}を育てるための医会・今の保健所にあたる衛生会の設立など、日本全体のことを考え、自分が地域でできることを行動にしていきました。

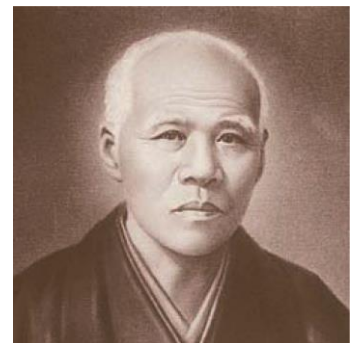
人間は誰もが平等であり、身分や男女差別が許されないという信条で、政治や経済、教育などの活動を行う次郎の考え方は明治政府の考え方と合わないところもありましたが、戦後つくられた日本国憲法には次郎の考え方が大きく反映されています。

12 丸山茂助^{まるやま も すけ} (1853年～1917年)

丸山茂助は、沼隈郡松永村(現在の福山市松永町)に生まれました。

茂助は、1878年(明治11年)に、下駄^{げ た}を売る店を開きました。その店は、2～3人の職人^{しきり}で桐の下駄を作って売っていました。下駄を作るには、桐の木が適していましたが、福山の近くには、使えるような木がありませんでした。そこで、山陰^{さんいん}地方や北海道^{からふと}、樺太(ロシア)まで木を探しに行ったそうです。そして、桐と同じような肌ざわりで、安いアブラギという木を見つけ、船で松永に運び、下駄の材料にしました。

そのような努力もあって、“松永の下駄”の名は、全国に広まりました。



〔丸山茂助〕

13 清水郁太郎^{しみずいくたろう} (1857年～1885年)

清水郁太郎^{しみずいくたろう}は1857年(安政4年)に備後国^{あんせい}深津郡^{びんごのくに}吉津村^{ふかつぐんよしづ}(現在の福山市吉津町)に生まれました。東京大学の初代日本人産婦人科学の教授であり、医学博士^{はくし}の第1号です。

第1回文部科学省^{か ん びりゆうがくせい}官費留学生^{りゅうがくせい}(国が留学費用を負担する留学生)でドイツのベルリン大学に留学しました。帰国後、漢方医学が主流だった時代に、患者を診察する臨床診療^{りんしやうしんりやう}中心のドイツ産婦人科学を日本に取り入れました。日本の産婦人科学の進歩^{しんぽ}に貢献しました。



〔清水郁太郎〕

14 ^{もりしたひろし} 森下博（1869年～1943年）

^{もりしたひろし} 森下博は1869年（明治2年）に現在の福山市鞆町に生まれました。現在は医薬品、化粧品などを取り扱っている企業、「^{もりした}森下^{じんたん}仁丹」の創立者です。広告に、自社製品の内容だけでなく、世の中に役立つ広告方法を実践しました。そして、大々的な広告宣伝により利益を上げたことから「日本の広告王」と呼ばれました。利益の一部を社会に還元し、自然災害や貧しい人たちへの支援、公共事業への寄付など、多くの社会奉仕活動を行いました。



〔森下博〕

15 ^{たけだごいち} 武田五一（1872年～1938年）

^{たけだごいち} 武田五一は1872年（明治5年）、福山市西町に生まれました。東京帝国大学（現在の東京大学）を卒業後、東京帝国大学助教授をはじめ、様々な大学で教師として働きました。法隆寺国宝建築修理事務所長などを務め、橋や工芸デザインの分野でも活躍しました。福山市市章の選定、福山市公会堂、福山市庁舎、福山市議会議事堂などを手がけました。



〔武田五一〕

16 ^{やまもとたきのすけ} 山本瀧之助（1873年～1931年）

山本瀧之助は今の福山市沼隈町に生まれました。一時は東京で勉強することを夢見ましたが、16歳の時に地元の小学校の先生になりました。

瀧之助は日本の文明化のために、福山の青年を育てようと青年会をつくりました。当時は青年といえば立身出世をめざす都会の青年のみを意味しました。しかし、田舎にも文明化に目覚めた青年がいることを主張し、青年会をつくりました。青年会では勉強会やボランティア活動などを行い、その考え方や活動を全国へ広めました。

瀧之助は、「1日の中に少なくとも何か1つはぜひ善いことをしよう。」という「一日一善」を進めました。そのことを、日記に書くことで自分の達成感を高め、さらに未来の成すべきことを考えることにつなげようとした。また、その日記を順番にまわして読むグループをつくりました（巡回日



〔山本瀧之助〕

記)。日記を回し読むことで、お互いの考え方や行動から学び合うとともに、青年会員同士の絆や信頼関係を強めることをめざしました。

また、瀧之助は全国各地に足を運び、青年リーダー養成を目的として、1都2府39県で開催された全国青年講習会で、120回にわたって講師として指導を行いました。

この講習会では、人と人との交わりを大切にし、2～5日間寝食をともにし、車座になって研修を深めました。講習生は延べ5000人を超えました。瀧之助は「青年の父」と尊敬されながら、1931年（昭和6年）、58歳の生涯をとじました。



〔車座になったの講習会〕

ふるさと豆知識

瀧之助の著書

『田舎青年』 23歳で著した「田舎にすむ学校の肩書きなき青年もひとしく青年なり」という書き出しで始まる。青年運動のバイブル的な存在として広く読まれました。

『良民』 地方青年向けの雑誌として1911年（明治44年）から約10年間発行されました。青年の自覚と修養を勧める内容の雑誌です。



17 吉田龍蔵（1874年～1945年）

吉田龍蔵は1874年（明治7年）、鳥取県に生まれました。1901年（明治34年）深安郡中津原村（現在の福山市御幸町）に吉田医院を開業しました。当時の深安郡神辺町の片山周辺で発生していた原因不明の風土病の患者を診療しました。自ら多くの患者を解剖して原因究明に取り組み、京都帝国大学（現在の京都大学）の藤浪鑑教授と協力し、世界で初めて人体から「日本住血吸虫」を発見しました。また、その感染ルートも解明しました。



〔吉田龍蔵〕

18 磯永吉 (1886年～1972年)

磯永吉は新馬場町（現在の福山市霞町）に生まれました。農学博士・作物育種学者として活躍しました。東北帝国大学農科大学（現在の北海道大学農学部）を卒業後、台湾へと渡り、台湾米の品質改良や台湾における日本米の品種改良に取り組みました。育成した品種は214種におよび、育成した米にちなみ「蓬莱米の父」と呼ばれました。



Eiichi Ise

〔磯永吉〕

19 藤井厚二 (1888年～1938年)

藤井厚二は現在の福山市宝町出身です。建築家・建築学者として活躍しました。東京帝国大学（現在の東京大学）卒業後、建築環境工学の分野を開拓しました。日本の風土に適した住宅様式を研究し、日本と西洋的な空間構成をかけあわせる手法を提示するなど、この分野において先駆けとなる実績を上げました。1928年（昭和3年）に京都に建てた平屋建ての自邸「聴竹居」は、近代住宅建築の名作として知られています。



〔藤井厚二〕

20 宮城道雄 (1894年～1956年)

宮城道雄は1894年（明治27年）兵庫県に生まれました。7歳の時に失明し、箏曲の道を志します。日本古来の音楽である邦楽の本質を追求し、邦楽の伝統に根ざしつつ、洋楽の要素も取り入れた活動や作品は、「新日本音楽」と呼ばれ、新たな分野を確立しました。

「春の海」を作曲し、80本の弦を持つ大型の琴「八十弦」を発表しました。父の故郷「鞆の浦」に思いを馳せ、「春の海」は瀬戸内海の潮の香り、潮騒などが表現されていると言われています。



〔宮城道雄〕

21 藤井崇治（1894年～1975年）

藤井崇治は1894年（明治27年）に深安郡山野村（現在の福山市山野町）に生まれました。京都帝国大学（現在の京都大学）卒業後、逓信省（現在の総務省）に入り、郵便番号制度の先駆けとなる郵便戸番制の採用などを果たしました。

電気庁（現在の資源エネルギー庁）長官や電源開発株式会社の総裁として活躍し、日本の戦後の経済成長を支える電力需要への対応に貢献しました。

22 小山祐士（1904年～1982年）

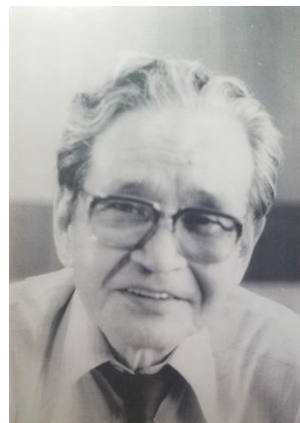
小山祐士は1904年（明治37年）に現在の福山市今町に生まれた劇作家です。慶応義塾大学在学中から小山内薫を尊敬し久保田万太郎らに教えを受け、多くのすぐれた演劇の台本を発表しました。主な作品に「瀬戸内の子供ら」「二人だけの舞踏会」などがあります。



〔小山祐士〕

23 天野辰雄（1910年～2001年）

天野辰雄は1910年（明治43年）福山市光南町に生まれた天野実業株式会社の創始者です。地域スポーツの振興を図ることを目的に、私財を投じて天野スポーツ振興財団を設立しました。1954年（昭和29年）～1997年（平成9年）の43年間の長きにわたり福山市体育協会（現福山市スポーツ協会）の会長を務め、この間、協会の法人化にも尽力しました。国民体育大会やアジア競技大会広島運営に携わるなど、生涯にわたって福山市のスポーツ界を導きました。



〔天野辰雄〕

24 塩出英雄（1912年～2001年）

塩出英雄は福山市城見町に生まれた日本画家です。帝国美術学校（現在の武蔵野美術大学）で金原省吾、高楠順次郎、奥村土牛に教えを受けました。「泉庭」が日本美術院賞を、「春山」が内閣総理大臣賞を受賞しました。1973年（昭和48年）に私財を寄付することで公益に貢献した人に贈られる紺綬褒章、1984年（昭和59年）に勲四等旭日小綬章を受賞しました。日本美術院の元常任理事です。

25 本田實（1913年～1990年）

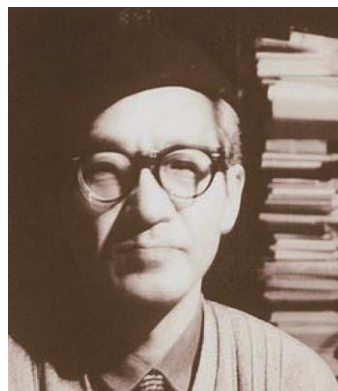
本田實は1913年（大正2年）に鳥取県に生まれました。独学で天文学を学び、1937年（昭和12年）に福山市瀬戸町にあった黄道光天文台に入所しました。生涯、彗星探しに専念し、自身の名前が付けられた本田彗星をはじめ、12個の彗星と11個の新星を発見しました。

26 木下夕爾（1914年～1965年）

木下夕爾は、深安郡御幸村（現在の福山市御幸町）に生まれました。

大学で薬学の勉強をし、父の跡を継いで薬局を営んでいました。高校生の頃から詩を作り始め、児童詩集「ひばりのす」など数多くの詩集や俳句の本を出しています。

福山市内の小中学校を中心に、多くの校歌の歌詞も作り、たくさんのお子どもたちに歌い継がれています。



〔木下夕爾〕

27 小林政夫（1914年～2000年）

小林政夫は1914年（大正3年）に福山市西町に生まれました。漁網などの網製品を扱う日東製網株式会社の社長に就任し、業界トップメーカーに育て上げました。他にも福山ライオンズクラブ、広島経済同友会福山支部を創設しました。

福山商工会議所の会頭を25年にわたり務め、戦後の高度経済成長期における地域の経済発展に尽力しました。



〔小林政夫〕

28 大島久見（1915年～2004年）

大島久見は1915年（大正4年）に福山市光南町に生まれました。日本の古典芸能である能の流派の一つ、シテ方喜多流の能楽師です。西日本では唯一、全国的にも珍しい個人で能楽堂を建て、定例会会を開催するなど能楽の普及に努めました。国重要無形文化財の総合認定保持者でした。



〔大島久見〕

29 榮久庵憲司（1929年～2015年）

榮久庵憲司は、日本を代表する工業デザイナーです。1929年（昭和4年）に東京都で生まれ、その後、福山市鞆町などで育ちました。今の福山誠之館高等学校を卒業して、東京芸術大学に進学しました。1957年（昭和32年）に「GKインダストリアルデザイン研究所」を設立し、キッコーマン卓上醤油瓶や秋田新幹線「こまち」などの数多くのデザインを手掛けました。1988年（昭和63年）には、世界最高峰のデザイン賞の一つである米国工業デザイン協会より世界デザイン大賞を受賞しました。